

ように、我々の体操も期せずしてより高次の目的に奉仕しているのである。ここ極東では、イギリスの影響がスポーツの領域でも優位を占めていて、野球やサッカーがどこでも知られているが、ここでも私たちは我々の身体運動のあり方を示してドイツのための理解を促進するのだ。6月1日には50人の日本の教師と体操教師が我々の体操を見に来て、競技場で私たちと会うことになっている。

我々の体操精神に力強い「がんばれ！」という言葉を贈ろう。

最後に述べられていた日本の教師たちは実際、ドイツの体操を見るために6月1日にやって来た。体操の指導者はこの日のために次のような体操演目を準備して、これを収容所に報告した。

板東、1918年5月30日

「収容所体操クラブ」の 開始午後3時45分
18年6月1日土曜日開催の体操の

式次第

A. 器械体操

- | | | | |
|--------|--------|--------|------------|
| 第1チーム | 鉄棒、平行棒 | 第3bチーム | 逆回転、平行棒(Ⅱ) |
| 第2aチーム | 平行棒、鉄棒 | 第4チーム | 平行棒(Ⅱ)、逆回転 |
| 第2bチーム | 鞍馬、小鉄棒 | 第5チーム | 小鞍馬、ゲーム |
| 第3aチーム | 小鉄棒、鞍馬 | 第6チーム | ゲーム、小鞍馬 |

B. 器械体操後：一斉徒手体操

C. 重量挙げチーム：

重量：1,45 ツェントナー²、1,15 ツェントナー、1 ツェントナー

2 ツェントナーはドイツの店頭的な重量単位。1 ツェントナーは 50Kg。

両腕上げ、
片手上げ、
片手ジャーク、
片手スナッチ

書記は6月3日に日本の教師のために催された体操について以下のような報告をした：

板東、1918年6月3日

彼等は5月15日に来たがっていたが、私は高木のもとに出向き、それを6月1日土曜日に延期させることに成功した。雨のときは6月5日に順延予定となった。

私たちははじめ、鉄棒と平行棒の模範チームのみ編成するつもりだったが、自分たちの定例の体操時間を持ち、第1チームだけ鉄棒と平行棒をさせることに決めた。しかし金曜日には雨が降り始めた。フェルヒネロウスキーとハーゲマイアーと私はこの日、スポーツ器具を探しに徳島に行っていた。土曜日の朝には我々の走り幅跳び用の砂場は水でいっぱいになっていた。目を飛び出させて私たちはそこに立ちつくした。どうしよう？ムックスはすでに明け方から排水孔を掘っていた。吸い込まれる水がごぼごぼと音を立てると小声で歓声があがったが、残念ながらそれは長続きしなかった。そこで私たちはバケツを手にとった。バルクホーン、フォン・コステノブレ、年配のレーレケ、ヤンセン軍曹、マイ、ムックスらが手伝い、すぐに砂場の水は空にした。砂が広げられ、川から新しい砂を取ってきた。午後3時に体操場は準備が整った。フェルヒネロウスキーと私が日本人の体操教師を外のテニス場で目にし、日傘によってご婦人がたが来ていることが推測できたので、私たちはベンチに赤い敷物をきちんと敷いた。しか

し日本人の女性体操教師は残念ながら中に入れてもらえなかった。体操はうまくいった。ルドルフが逆回転と大車輪を始めて、第1チームは拍手を引き出した。重量挙げ選手がそれぞれの重量を持ち上げ、チーム全体のイメージは良いものだったに違いない、たとえ我々から見ればまだよい状態ではなかったとしても。徒手体操は音楽に合わせてなされ、準備せずにはそういうわけにはいかなかったくらいうまくいった。

聞いたところでは、今度は毎土曜日に50人の教師が村長の引率のもと、私たちの活動を見に来たいとのことだ。先述したように、私はこのことすべてをドイツのプロパガンダの観点で見ていたのである。こうしたことは、平和の時代なら別の部署によって満足な資金もなく試みられるものなのだが。

先週の体操活動を見た記録者は6月の収容所漫筆で、次のように述べていた。

—いまやスポーツが始まり、板東でまったく新しいものとして体操もまた花開き美しさの盛りを迎えると、精神的活動の方は季節が進むにつれてますます怠惰になっていく。—

体操クラブは今までのところ、順調に発展を遂げてきた。体操の時間にはその都度、新しい体操選手が入会を申し込んできて、新しいチーム分けが必要となった。

「収容所体操クラブ」

新加入のメンバーによって、総数は器械体操者が101人にのぼり、チームの改革が必要となっていた：

第1チーム： ルドルフ+、フェルヒネロウスキー+、クーフース、ベーフィ

ング、フレーゼ、プレス、オイヒラー、クノップ、フォラント、クナープ、メンケ、マイ、ヴァルター

第2 a チーム： バルクホールン＋、ボンクール、クロイツアー、ショッペ、マロン、ロッソウ、ゴルトアマー、ヤンセン軍曹、シュマーレンバッハ、ディーボルト、F. ハンゼン、バルム、ゼーゲルケン。

第2 b チーム： プリンツ＋、シャルフ、パウアー、グラウル、ファイスト、クルツケ、ハインク、レッターマイアー、ハンガー、エルスナー、コッホ。

第3 a チーム： ムックス＋、ハンセン、ヴィンクラー、オール、ビショッフ、レーザー、レマクルス、ハック、ヴィヒェルハウス、メラー 曹長、シュルツ曹長。

第3 b チーム： ハルクス＋、R. コッホ、ドロピエウスキー、ムラデック、ヘーリング、ケンツォラ、シュタール、クレーマー、ヴォルフ、ローデ。

第4 チーム： クラウス＋、バルトス、ルートヴィッヒ、シューベルト、シュタイル、フォン・コステノブレ、ケンプ、ライディヒ、ハーゲマイアー、ヘルム、シルク、ミアスヴァ、ヴォルムス、シュネコ。

第5 チーム： ガックシュタッター＋、ヘヒト、J. ミュラー、フーバー、ヴェルター、フェネヴィッツ、R. ミュラー、ティム、ドロステ、ベーマー、A. フィッシャー。

第6 チーム： レッチュ＋、グラディンガー、ウルブリヒト、ボス、グロースマン、フィードラー、Wilh. マイアー、シュテッパン、A. ユンカー、クルーゼ、オッフアーマン、ホーン、ブルホープ、E. ハイゼ。

チームは、今度は次のように体操開始前に整列する：

第3 b	第4	第5	第6
第1	第2 a	第2 b	第3 a
体操コーチ			

年配の仲間たちで器械体操はもはやできないと思っている人には、照会に応じてそれぞれの器械体操の後に行われる徒手体操に参加できることが知らされた。体操する人々の列の中に年配の人たちだけではなく骨格がまったく貧相に見える若い仲間もいたことには、なんの不思議もない。

体操クラブの設立と同時に陸上競技部門が作られ、80名の参加者がそこに加入した。スポーツ委員会はこの部門に2か所の場所を割り当て、水曜日と金曜日に練習できるようにした。

初回は1918年6月5日午前7時に始まった。予定していたのは以下のとおり。

1. 幅跳び、2. 砲丸投げ、3. スタート練習、4. ボール投げ、5. 跳躍板なしの高跳び

この時には約50人が参加した。これだけの参加があったので、この種の新しいスポーツも発展していくことが推測できた。次の時間には80メートル走、ハードル競走、リレー競走、円盤投げがなされた。

予期に反して、こちらには約20人しかやって来なかった。これは円盤やハードルといったいくつかの器具がそんなに早く調達できなかったこととも関連している。円盤投げは、オイヒラーが東京に注文したものが到着していなかったために、木製円盤でやらなくてはならなかったのだ。

400メートルリレーでは第1クラスでは次のようにリレー組が編成された：

1	2	3	4
ベーフィング	フォイアーバッハ	ベルリーナー	ツィーマーマン
ミスリン	ヘンチェル	フレッセ	メンケ
ハック	クロイチュ	オイヒラー	アルプスI

ニーマイアー フェルヒネロウスキー ハイנק ルートヴィッヒ
 補欠：プリンツ 補欠：ヴィヒェルハウス 補欠：モンゼース 補欠：ショッペ

5

ヴァイホルト
 ハンガー
 パウアー
 クロイツァー
 補欠：グラウル

6

F. ローデ
 フォラント
 シュタインライン
 ヘーリング
 補欠：ボック

その他の種目でも差の違いが大きすぎるため2クラスに分けなくてはならなかった。

フェルヒネロウスキー指揮下の第一
 クラスは以下の者たちから構成される：

フェルヒネロウスキー、隊の指導者	
パウアー	レーザー
クロイツァー	クナープ
ショッペ	ヴァイツ
ルートヴィッヒ	ミスリン
ハンガー	アムメーター
ケースフース	ファイスト
ローデF.	クロイツ
ハイנק	ガイスラー
ベーフィング	ヘーリング
ヴァイヒホルト	ハック
マイ	ヴィヒェルハウス
フレッセ	ボック
モンゼース	シュタインライン
グラウル	ベルリーナー

フォイアーバッハ指揮下の第2
 クラスは以下の通り

フォイアーバッハ、隊の指導者	
オーレン	シュタール
ヤンツェン	オール
シャルフ	レーンハルト
ボンコーア	バルトス
ヴァーグナー	シュテッパン
ヘルム	ケムプ
ウルブリヒト	ヘヒト
シューベルト	J. ミュラー
ニーチェ	ガックシュタッター
グロースマン	ヴェルター
マロン	ユンカー
フィードラー	ビショッフ
タインチェ	ライディッヒ
レツチュ	クレーマー

オイヒラー	ツイーマーマン	ケントツォラ	O. シュルツ
フォイアーバッハ	ヘンチェル	ヴィルムス	メラー曹長
クノープ	ニーマイアー	フォン・コステノブレ	エッゲブレヒト
フェッター	プリンツ	ハーゲマイアー	ツイマー
フォラント	アルプスI	ロツソウ	アルスレーベン
ゴルトアマー		ボルヒャーディング	

季節が暑くなると徐々に体操時間への参加者は減ってきた。このことは1918年7月23日付けの日刊電報通信に出された通知から見て取ることができる。

陸上競技

私は明日水曜日の朝7時から9時までいつもの体操の時間があることと、無断で練習を休む者が陸上競技の参加者名簿から削除されることに注意を促したい。

フェルヒネロウスキー

しかしこの注意ももはや役に立たなかった。多くの者がますます陸上競技から身を引いてしまったということは、陸上競技が体操の時間外でのみなされる一般的な体操であると彼らが理解しているせいだったのだろう

しかし体操クラブではまた熱心に一般的な体操もされていたので、陸上競技に申し込んでいた多くの体操選手たちは十分に満足していて、そのためもはや練習時間にそんなに熱心には来なくなったのである。他方、初心者たちによって、陸上競技では特別な素質ゆえにすぐのものになり、それゆえ準備のための練習に出てきたがらない者もいるという見方が、ひょっとしたら広められていたのかもしれない。練習時間の参加者がますます少なくなっていく。重苦しい暑さがスポーツへの情熱の最後のひとかけら

までも吸い出してしまい、2か月後には陸上競技はばらばらになった。

陸上競技の領域に以上のようにしばし散策をした後、我々の体操に話を戻そう。

チームの固い同盟がここではすぐに、メンバー間により密でより友好的な関係の広がりを伴ってくることとなった。

また先頭に立つ人々は健全な基礎の上に立って手に手を取って仕事をした。

6月15日の書記の記事がそのことを証拠立てている。

1918年6月15日

6月11日、フォラントの誕生日に、私たちは彼にこれを機に第1チームの全員の署名で免状を手渡したのだが、この日の夕方6時に私たちは最初の「役員」会をもった。10日に私たちは新しい鉄棒の敷設と鉄棒と吊り網の土台のための砂場掘りを始めたのだが、夕方、ムックスは土台を平行棒が今立っている日本の床屋の前に取り付け、そのかわり第6チームの平行棒を引き上げ、これらの平行棒を新しく海軍砲兵隊の平行棒の横に埋め込むように手配した方がよいということを思いついた。そうすればこの平行棒はこの目的のためにまた移転しなくてはならなくなるだろう。それから6時に体操の教師と書記、器具監督ムックス、体操実地指導者たちがバルクホーンとハルクスを除いて、やって来た。プリンツはちょうどシュラークバルをやっていた。彼の意見はわかっていた。新たな変更の必要性は満場一致で否決された。また「必要でない」が望ましい作業に十分な働き手が存在するかという問題も、こうした過度な仕事好きはどちらかということ多くはないということで片付けられた。こうしてその問題は済まされた。この問題は自ずと自動的に、体操コーチ、書記、器具監督、体操実地指導

者といった体操チームの利害代表がどのような構成であるかを明らかにした。総会が招集されることもありうるかもしれない。

昨日、6月14日にルドルフとマイと私はマイスナーとクラウトケ2を連れて板西の農業学校にいった。私たちはそこで体操の実演をしたのだが、別れ際校長が、定期的に何人か体操選手を正規の授業のためにこちらへ寄越す許可を高木から得るようにしたいと言った。残念ながら、今回はほんの数人しか連れてこられなかったが。

1918年6月25日、鉄棒とロープ登りのための跳躍台が設置された。

27組の腕が11メートルの長さの台座をやすやすとセットした。首を振り、「不必要な支出だ」などと言っている野次馬にはもちろん事欠かなかった。それは我々体操をする者にとっては、いずれにせよ、役立つお気に入りの器具となっている。

クラブ会員を体操時間に定期的に参加するよう促すために、体操コーチの指示でチーム日誌を作った。チーム帳から読み取れる次のような統計が、5月26日から6月26日までの体操訪問のことを忠実に描き出している。

		参加	欠席	無断欠席
チーム	I	89	7	5
"	II a	89	25	3
"	II b	48	18	24
"	III a	52	13	12
"	III b	45	15	18
"	IV	53	9	1
"	V	58	23	6
"	VI	77	17	10

いくつかのチームでは参加のためには改善の余地がたくさんあったので、夕方の点検の変更について以下のような請願が収容所事務に提出された：

板東、1918年6月30日

高木大尉殿

「板東収容所体操クラブ」は今まで体操の時間を水曜日と土曜日の午後4時から5時まででした。この時間は今では暑すぎます。夕方6時から7時までの時間が、人々が食事を終わり当番兵が片付けを終わった時間なので、この時間帯が最適だということが明らかになりました。この時間より後では暗すぎます。6時に始めるのは、食後すぐであるため、健康にはよくありません。

暑い時間帯でも体操をきちんと行う困難は大きいので、それで私たちは大尉殿に水曜日と土曜日の点呼を6時にしていただき、私たちが体操の時間を6時には始められるようにすることで私たちの努力を支えていただきたいと思います。

体操の時間を朝にすることはまた、たいていの体操選手には任務と作業のため差しつかえがあるので、適切ではありません。

体操が健康に対して有する価値については、大尉殿が私たちのやっていることに今までいつも関心を持って受け入れていただいていたのですから、詳しい説明は省かせていただきます。

折り返しご返信を心よりお待ちしております。

「板東俘虜収容所体操クラブ」を代表して

(署名) オイヒラー

予備役曹長

残念ながら私たちの嘆願はかなえられなかった。体操時間の参加者はそれゆえ、もちろん、ますます増す暑さに引き続き苦しめられ、低調だった。

我々の体操場の維持・完成は自分たちですということは実際、言うまでもないだろう。たくさんある中の一つの例が、7月6日の次の記述である：

跳躍台は完成したが、まだ走り幅跳び用砂場ために砂の運び込みがされていなかった。この目的のために使わせてもらっていた公用車が翌日から収容所菓子店の移転のために使われることとなった。器具の使用をこれ以上先延ばしにしなければ、素早く行動する必要があった。こうした事情が役員から知らされたとき、すぐに約30人が名乗りでて土砂降りの雨の中を収容所から半時間離れた川から砂を運んでくれた。—これこそ、こうした日々に体操選手たちの心を満たしていた精神だったのだ。

熱狂は必要な作業のためだけのものではなく、また最初のお祭である体操の父ヤーンの生誕記念に体操クラブが催す最初のお祭りに際しても示されたのである。

日刊電報通信には次のような広告がなされた：

「板東収容所体操クラブのヤーン祭」式次第

1918年8月11日午後7時

1. プロローグ、活人画、ブリュッセル行進曲
2. シニアチームの体操
3. 斉唱「体操選手よ、いざ戦いへ」
4. 楽曲
5. 馬乗り人間ピラミッド
6. シニアチームの歌の披露
7. 「大理石」グループ
8. 楽曲

9. 齊唱「おお、ドイツよ、誉れ高く」

10. 楽曲

書記のオイヒラーによる、この記念祭の実現と進行、ならびにその後の苦勞についての手記にはこう書かれている：

1918年8月11日の「ヤーン祭」

7月7日、体操コーチによって提案された「ヤーン祭」について、私はフェルヒネロスキー、ルドルフと最初の協議をした。大枠は決まった。フォラントも加わって、4人のFと横断幕の作成を引き受けてくれた。フェルヒネロスキーはピラミッド、ルドルフは祝祭用の作詞、フィードラーは勝者への花冠を編むことになった。大理石の群像は、この分野に精通した「プリンツ」に依頼することになった。体操歌の本も作成される。ムックスはステージを引き受けた。こうした素案に基づいて7月24日、体操コーチと指導者たちとの協議が招集された。協議はグラス一杯のビールを飲みながら、和やかに終了した。「ヤーン祭」はバルクホーンとレッチュの意見とは異なる決定がなされた。この夜にはもう秋の体操祭についても話し合われ、5～6競技の概要が確定した。

いつものように、ムックの下準備では疲れを知らない熱意が示された。[8月]10日、我々は15人で山に緑の草木を取りにでかけた。翌日の日曜日の朝、天気はまずまずの印象だったので、運動場の整備が始められた。ハンゼンが机を調達し、クーフスは舞台専門家としての才能を発揮した。午後5時、すべての準備が終了した。日本側からの言い知れぬ障害に見舞われはしたが、赤と白の灯りを調達した。高木大尉の仲介で日本の警察から借用した「投光器」では不十分であった。7時に会場は満席になった。ひとつ6銭の赤い提灯が100個、板東から借用した6個の家紋入りの大きな

提灯が吊るされ、その下に白い布で覆われた20台のテーブルが、木の枝で飾られて置かれた。舞台はレスリングのリンクに置かれ、電灯で照らされた横断幕が上の方にかかっていた。おそよ160人が集まり、司会を務めたのは体操コーチで左側に着席し、私はそのトレンデルブルク中尉の右に座った。行進曲による輪舞で始まった。それから前口上が始まり、ヴェーゲナーにより巧みに話が語られた。レオンハルトがそれを詩作した。生きた彫像「俘虜の体操選手たちが父ヤーンに敬意を表する」が赤い灯火で照らされて大成功を収めた。背の高いイーゼルの上にラーゼンナックにより描かれたヤーンの肖像画が置かれ、その両側でフンピヒとヴァルターが花環を絵の上に支えていた。マイが我々の流儀である白い半ズボン、黒のストッキング、オハイオ帽？に身を包んで、ヤーンに一本の枝を差し出した。音楽のあとで体操チームの演技。棒体操、ピラミッドは盛大な拍手喝采を浴びた。照明がもっと上手にできたかもしれなかったが。フェルヒネロスキーのピラミッドも同様に照明が今ひとつだったが、それでも彼らはよい効果を挙げ、多くの拍手喝采をもらった。それから体操チームの歌「体操は最上の医学」が歌われた。まさに即席で、不十分ではあったが、友好的な心情から発したものであることを、みんなは理解していた。それが気分をなごやかにする要素でもあるのだ。ハイルは「二羽のカラス」の歌をリュートの伴奏で歌い、フレーゼは「大砲の陰口をたたく」の詩を朗読した。盛大な拍手喝采。ルドルフの所産。気分の高揚は最高潮に達し、体操チームの熱狂、喜色満面の顔、力強い歌声、遠く過ぎ去った体操の黄金時代の古い記憶が現出した。それを達成するのが予定だったし、目的だった。

10時に厳かに終了。本日の朝その後日談。バルクホーン、ルドルフ、フェルヒネロスキーが事務所に呼ばれる。3人が10時を過ぎてもまだフェターの部屋にいるところを、監視の諏訪に見つかったからだった。バルクホー

ンは2日間の外出禁止。ルドルフとフェルヒネロスキーは1日の外出禁止を命じられた。2時に私がバルクホーンと一緒に事務所に呼ばれ、以下のようなやり取りがあった。

【冒頭6行ほど削除の形跡あり。次の文章が印刷された紙片が挿入されていた】

高木:(長らく熟考してから)とても困った事態だ。この三兄弟(山田中尉、諏訪中尉、警備将校のこと)が今日の食事のとき私に向かって「大尉はドイツ人ですね。そんなことでは、職を失いますよ」と難癖をつけおった。私は激怒して、茶碗を投げたのだ。とても面倒な問題だ。もう大尉ではいられないかもしれない。

【ここまで】

私:大尉殿は面の皮が厚くなければ。神経質ではいけません。

高木:もう面の皮は厚いよ。もう4年も経つ。そろそろ改めなければ。

私:ステルカミガアレバ、タスケルカミモアル。

高木:[笑って扇子の背後に顔を隠す。]

私:大尉殿は後戻りしてはいけません。ずっとやり通していいのです。10月には終わりですから。

高木:強くて面の皮が厚くても、20人の子供相手には弱いんだよ。

私:でも気合があれば、何とか。

高木:たとえ体操の選手や柔術の選手であったとしても弱い。

私:大尉殿、特別な勇氣、忍耐、平静心が必要とされる前哨にいるように、ダラダラしないでください。

高木:この兄弟らは、昨日の祭り全体が酒を飲むための不正行為だったと主張している。私は大理石群像グループの口実で祭りを許可したのだ。それで、(バルクホーンに)4日間の自室での謹慎、そして(私に)1日と明日2時までの自室での謹慎を命じる。

私は大尉に煙草をねだった。大尉は「藁束」しかないという。我々は二人して一本吸った。捕虜の嘆きと「兄弟たち」の視野の狭さについて愚痴ったあとで、部屋に戻ることを許された。

こうした一部ユーモアのある記述のあとで、我々の祭りの真面目な評価も載せておこう。

「収容所体操クラブ」の「ヤーン祭」

あらゆることを勘案すると、まだ「祭り」をする段階ではないことを認めざるをえない。しかし、集団体操をする、つまり共同の楽しさを持つと、どんなに心がときめき、我々体操選手がどれほど互いの支え合いを感じ取っているかを体験した人なら、こうした内なる声を、一度楽しい仲間の中で歌と杯の響きで表現してみたいという望みも理解してもらえよう。たとえ鉄条網の中にあろうとも。

この願いは。我々にそうした機会を与えてくれた体操の父であるヤーンの誕生日にかなえられた。故国からこんなに離れ、日本の提灯やお盆提灯の下で、という変わった状況においてではあるが、過去の様々な姿が親しい歌や音楽とともに思い浮かんできた。それらの映像は我々の周りに新たな絆を生み出し、同時に我々の目をドイツの故郷、つまり自由の入口に向けさせてくれた。そのドイツで、いつの日か体操をみんなのための仕事とすることで、我々の民族を崩れることなく、陽気で新鮮で自由で強くあり続けさせたいのだ。

1918年8月11日の思い出のために、「詩」つまり我々の収容所の詩人たちが作った詩で、この行事を記録しておきたい。